

### 第3節 荒子・丸山・梅木遺跡の居館について

#### 1. 居館の立地と構造と規模

3居館について、その概要を次の表にまとめた。

(立地) 立地に関しては、3基とも川に近接している点が共通している。そのために川が原因と思われる居館の破壊がある。

荒砥荒子遺跡では東に接して、現在江竜川が南北方向にながれている。川の東側は一段高くなっている、川は平地から一段高い地形変換点の境界に添つて流れている。その変換点の下段に居館が作られている。おそらくこの川は古代においても付近を南北方向に流れおり、その川の氾濫等により、居館の北西部分が深く削り取られ谷を形成したものと思われる。谷の幅は約30m、深さ約1.6mと大きな規模である。

梅木遺跡では東に接して桂川が流れている。この川は江竜川より規模が大きく水量も多い。おそらくこの川の氾濫により、居館の大部分が削り取られたものと思われる。残っていたのは南側の堀と柵列だけであった。削られた居館北側は現在低く水田として利用されている。

丸山遺跡は、大きな荒砥川の右岸に位置する。しかし他の居館と異なり、河川に接してはいない。さらに河川の氾濫原でなく、氾濫原より約10m高いローム台地の上に作られている。たとえ荒砥川が氾濫しても館には影響は無かったであろう。このローム台地は舌状になっており、先端部分に居館が作られていた。周辺を見渡すことが可能な地形であり、この点が他の居館と大きく異なっている。

(構造と規模) 3居館とも堀と柵列を持つ。しかし布堀は梅木居館では掘られていなかったようである。

丸山遺跡では内部のほぼ全面にわたり竪穴住居が造られていたようである。中央の21号住居は大型で炉がなく、主屋と考えられている。他に掘立柱建物や祭祀等の遺構は存在しない。

荒砥荒子遺跡では2軒の竪穴住居と、残りが悪いが本来竪穴住居であったと思われる2軒の竪穴状遺構の計4軒が、居館に伴う時期の住居と考えられて

かった。ここに前半と位置づけた土器群は後半に含まれる可能性を否定できない。今後の大きな課題である。

#### 参考文献

- 『土器がかかる』古墳時代土器研究会 1997  
赤塚次郎「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
1990
- 田中広明『東国土器研究』第4号「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」東国土器研究会 1995
- 『下植木壱町田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
1999
- 『芳賀東部団地I(古墳~平安時代その1)芳賀団地遺跡群第1巻』前橋市教育委員会 1984
- 桜岡正信「群馬県内出土の暗文土器について」『群馬県史研究』第30号 1989

### 第3節 荒子・丸山・梅木遺跡の居館について

#### はじめに

##### 1. 居館の立地と構造と規模

##### 2. 伴出遺物と噴出火山灰と居館の時期

##### 3. 居館と集落と古墳の関係

#### おわりに

#### はじめに

荒砥地域の東西南北約8kmの狭い範囲に、荒砥荒子・丸山・梅木の3つの居館、さらに内容が明らかでないが、筑井八日市遺跡の居館を加えると4基の5世紀代の居館が作られている。このように狭い一定の地域に5世紀代の居館がまとまって作られている地域は、他に類例は少ないであろう。この中で内容や規模が明らかでない筑井八日市遺跡の居館を省いた、3居館の内容を比較検討する。また居館出現以前の古墳時代初頭からそれ以降の古墳時代後期までの荒砥地域の遺跡の動きの変化を詳しく探り、この地域に荒砥荒子遺跡の居館をはじめとした5世紀代の居館が多く作られた意味について考えてみる。

文章中で荒砥荒子遺跡・丸山遺跡・梅木遺跡の居館については、荒子居館・丸山居館・梅木居館と略して記述する。

#### 第4章 調査成果の整理とまとめ

いる。造られている場所は、柵列に添って東側に3軒、南西コーナー部分に1軒である。中央部分に建物を確認することはできなかったが、竪穴住居と掘立柱建物は造られていなかったであろう。

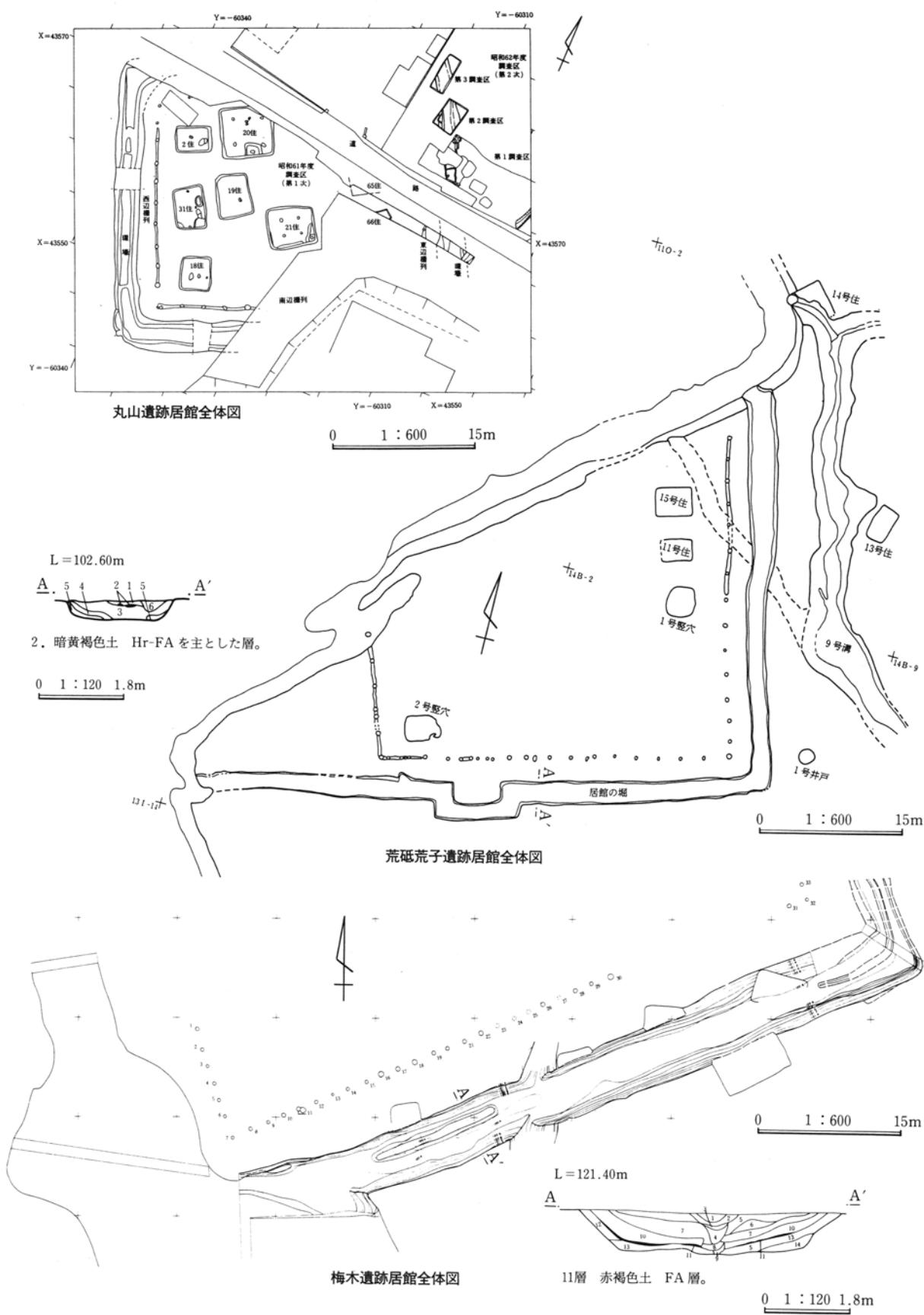
梅木遺跡では居館に近い古墳中期の住居は存在す

荒砥地域における居館の概要一覧表

		荒砥荒子遺跡の居館	丸山遺跡の居館	梅木遺跡の居館
立地	河川 地形 その他	小さな江竜川の右岸。北西部 分が谷により削り取られる。 水田の適地でない。	一級河川荒砥川左岸で、遺跡 周辺の平坦面より約10cm高い 小丘陵にあり、最近の開発前 までは、ほぼ完全に残っていた。	小さな桂川右岸。川の氾濫に より削り取られ南辺の堀と柵 例以外残っていない。
堀（環濠）	東西規模 南北規模 堀の幅 堀の深さ	59m + $\alpha$ (推定60m) 43m + $\alpha$ (推定45m) 1.8~3m 2.2m前後が多い。 18~46cm 32cm前後が多い	36m 25m 2.7m 1.2m	約85m 不明 4~6.6m 1~1.2m
	堀底部の標高差か らみた水の存在	南西の堀底部の標高102.3m 北東の堀底部の標高103.8m 1.5mの差である。この差は堀 の深さより大きい。堀に水は なかった。	南西の堀底部の標高 121.8m 北西の堀底部の標高 122.3m 0.5mの差である。この範囲内 の数値で水があったかは不 明。	西の堀底部の標高 120.8m 東の堀底部の標高 120.6m 0.2mの差である。この範囲内 の数値で水があったかは不 明。
柵	東西規模 南北規模 柱穴間の距離 堀と柵列の距離 柵列の柱穴の規模 柵列の柱穴の深さ	37m 33m 2.4m 2.2~2.4m 28~39cm 平均39cm 32~93cm 平均60cm	29m 不明（現状で22m） 2.4m 1.0~1.5m 20~43cm 平均31cm 45~90cm 平均70cm	63m 不明（現状12m） 1.8m 3~6m 平均5m 31~50cm 平均41cm 46~88cm
布堀	幅 深さ	30~39cm 10~15cm	20~30cm 10cm	なし
張出し	張出しの奥行き 横幅	2m 9m	不明	西側に可能性あり
内部構造	竪穴住居 その他	柵列内に居館と同時期の住居 2軒と、住居の可能性を持つ 2軒の住居状遺構がある。2 軒の住居の残りも悪く出土遺 物も少ない。同時存在には疑 問も残る。住居以外、他の施 設なし。	同時期と考えられる竪穴住居 が8軒調査されている。住居 の方位が濠、柵列の方位と近 似8軒の住居は重複すること なく整然と配置されている。 住居以外他の施設なし。	同時期の竪穴住居は存在し ない。古墳中期の住居で堀に切 られた住居1軒、柵列に掘り 込まれた住居3軒あり。他の 施設なし。
出土遺物	堀（環濠）内	柵列の東側の堀の中から多く 出土、高壊が特に多い。居館 の時期に近いと思われる。	南西西端部の環濠内の底部近 くから土器片が集中して出土 し3個の甕が図示されてい る。	堀内よりほとんど出土遺物な く、実測図は図示されてい ない。
	内部施設	同時期と考えられる竪穴住居 からはほとんど出土していな い。	居館に伴うと考えられる8軒 の竪穴住居が確認されてい る。その住居内より多くの出 土遺物あり。館の時期決定の 根拠となる。	出土遺物の報告なし。
	その他	堀に平行して掘られている9 号溝から多く出土、居館の時 期に近いと思われる。		館の堀により壊されている住 居と館の柵列により掘り込 まれている住居から多くの出 土遺物あり。しかし館以前の土 器である。
噴火火山灰 の堆積状況	堀（環濠）内への 堆積状況	堀の底部から25cmの所に Hr -FA の堆積あり。	壕の覆土上位に Hr-FA の堆 積あり（底面から約100cm）	堀の覆土下位で底部から10cm の所に Hr-FA 堆積あり

るが、堀により1軒が、また柵列により3軒が掘り込まれており、同時存在の竪穴住居は無いとされている。南側の堀と柵列寄り北の主要部分は全く残っていないために、内部構造は不明である。

### 第3節 荒子・丸山・梅木遺跡の居館について



第106図 荒砥地域における5世紀代の3居館全体図

#### 第4章 調査成果と整理のまとめ

柵列の作り方は、3居館とも堀の内側に添って造られているが、荒子居館だけは柵列が西側で堀に添うことなく北上している。長方形の堀に対し、ほぼ東西南北約37mの正方形の柵列を形成している。偶然の一致かもしれないが、この37m四方の中に丸山居館が堀を含めてそっくり入ってしまう。

3居館の規模は大きく異なる。堀の東西規模で比較すると丸山居館が36m、荒子居館が約60m、梅木居館が約85mと約25mの差をもって次々と大きくなっている。

堀の幅は荒子居館と丸山居館が2.2～2.7mと比較的近いが梅木居館では6m前後とほぼ倍の幅を持っている。深さは荒子居館が約0.32mと特に浅く、他の2居館は1.2m前後と深い。丸山居館が規模の割に深いのは傾斜地によるためか。

柵列として掘られている各柱穴の間隔は、丸山居館と荒子居館が約2.4mで丸山居館が1.8mと狭くなっている。柱穴の大きさは30～40cmと大きく深さは60～70cmといずれとも深いものになっている註1。

居館の出入口の施設として、張り出し構造がある。これが明らかなのは、荒子居館だけである。南の堀中央部を、南へ2m横幅9mほど張り出して造られている。この張り出し部分の内側には柵列ある。この柵列は張り出し部分で柱の配置が異なり、通常の柱穴の間に2本の特別な柱穴が掘られていた。門の存在を想定したい。

3居館を平面形で比較するために、重ねあわせたのが第108図である。最も小さな丸山居館は、堀を含めて、荒子居館の柵列の中にそっくり入り込んでしまう。荒子居館は堀を含めて、梅木居館の柵列の中にそっくり入り込んでしまう。また居館の主軸は南北方向でなく、少し東に傾いた南南東方向でほぼ一致している。荒子居館で見るなら、正面の出入り口が、朝日の登る辰巳の方向を向いているのである。このように、規模と方位における関連性は、おそらく偶然の一致ではなく、一定の規制のもとで造られていることを示しているようである。

#### 2. 伴出遺物と噴火火山灰と居館の時期

##### 荒子居館

土器の多くが堀と、居館と同時期と考えられる9号溝から出土している。それらの土器は、堀や溝の底部に近い位置から多く出土している。出土遺物の中で高壊が特に多い傾向を持っている。出土土器に時期的な幅はほとんど認められなく、ほぼ同時期のものと思われる。居館が使われなくなった段階で、破棄されていったものと考えられる。

堀の底から約25cmの所に、Hr-FAの堆積が認められる

この土器群と居館の時期は近く、土器群は今回の変遷図では4段階に相当する。5世紀中頃を含む前半の時期が考えられる。

##### 丸山居館

居館と同時期と考えられる8軒の住居から、多くの遺物が出土している。また居館の溝南西端部の環壕内の底部近くから、3個の甕が出土している。それらの土器群に、時期的な幅はほとんど認められない。この土器群は今回の変遷図では4段階に相当する。5世紀前半の時期が考えられる。またそれらの土器群の中に、一般集落と異なるような特別な遺物は含まれていない。

環壕の底から約100cmの覆土上位に、Hr-FAの堆積が認められる。Hr-FA降下の時期におそらく堀の多くは埋まっていたものと思われる。

##### 梅木居館

報告書の中には、居館に伴う堀から少量の遺物が出土したと記載されている。しかし小破片のためか図示されていない。居館に伴う遺物は不明である。居館の堀により削られた住居と、柵列により床下まで掘られている住居が4軒あり、そこから多くの遺物が出土している。それらの住居が意図的に埋められて居館が造られたのなら、居館の造られた時期と住居から出土した土器との時間差は少ないとになる。しかしそれらの住居は、3～4層の自然な埋没状況を示している。その埋没土を掘り込んで居館の溝が掘られていることと、住居が埋まらない状態で

### 第3節 荒子・丸山・梅木遺跡の居館について

柵列が出来たとは考えにくいこと等により、これらの4軒の住居がある程度埋まった段階で居館が造られた可能性が高い。住居から出土した土器群は、今回の変遷図では4段階に相当し、5世紀中頃を含む前半の時期が考えられる。これらの住居が埋まった後、おそらく5世紀後半のある段階で、居館が造られたと考えられる。またこのことは居館の堀の中に底部からわずか10cmの位置に、Hr-FAが堆積していたことも、Hr-FA降下時期に近いことを物語っている。明瞭な時期は決められないが、5段階後半で5世紀後半でも新しい段階を想定したい。西に近接する大室古墳群の前二子古墳と時期が近い段階の居館となりそうである。

これまで3居館の問題について検討してきた。造られた時期は、5世紀の古墳時代中期であることに問題はないが、同時期ではなく時期差が存在したようである。おそらく前半のある時期に、最も小さい丸山居館が微高地上に造られ、次に立地は異なるが、規模が比較的近い荒子居館が造られ、最後に規模の大きな梅木居館が造られていったものと思われる。

#### 3. 居館と集落と古墳の関係

今まで荒砥地域で発掘調査されている住居は、全体から見ると一部に過ぎない。その一部をもってこの地域の住居数の推移を語ることにどれほどの意味があるのかわからない。しかし他の幹線調査と異なり、県営圃場整備事業に伴う調査が多く、広い面積と多くの地点を調査している。そのためにある程度この地域の傾向を示していると思う。この仮定の上に、居館と住居数の変化について考えてみる。

これらの3居館が造られた荒砥地域の居館出現以前と以降の住居数について調べ、地域毎に表にまとめた。表が示すように3居館が出来た地域において、住居数の変化は少なく、居館が出来たことにより住居数が増加したような傾向も認められない。荒砥全体で5世紀以前の集落は4世紀後半が68軒、5世紀前半が81軒、後半が127軒となっている。

古墳は5世紀前半に荒砥地区には無く、近くでは南の伊勢崎市に御富士山古墳、東の赤堀町に赤堀茶

臼山古墳がある。5世紀後半になると10基前後つくられ、近くでは前方後円墳の今井神社古墳がある。6世紀になる同じように継続的に造られ、県内でも有数な前方後円墳3基の大室古墳群が登場していく。このように古墳については居館成立以降、この地域に県内でも有数な古墳が継続的に造られてくるようになる。居館との関係は非常に深いと思われる。しかし居館と古墳がどのように結び付くのか、明らかでない。

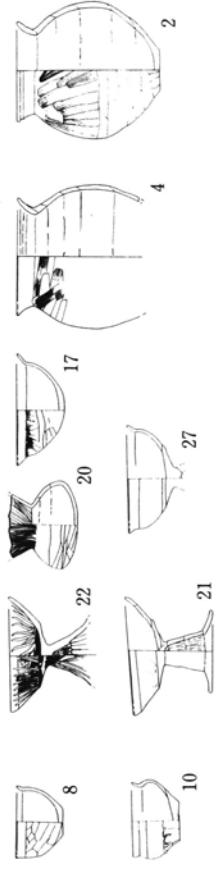
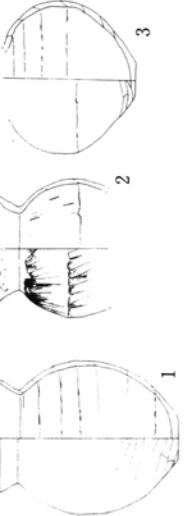
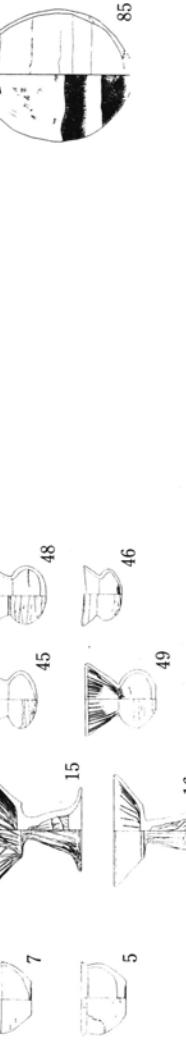
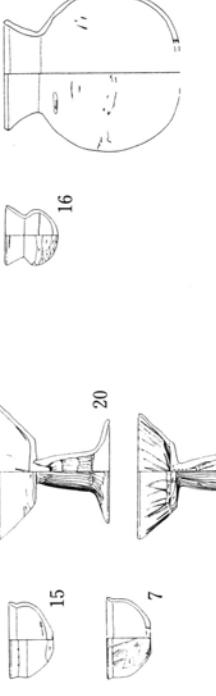
参考までに5世紀段階に居館の造られていない多野郡吉井町の例と比較してみる。荒砥地域と近い面積の中で4～7世紀段階で822軒調査されている。その内容を表とグラフで示した。比較してみるとほぼ同じ800軒の住居が時期的に大きく異なっていることがわかる。居館が確認されていない吉井町では、4世紀から5世紀の住居は極めて少なく、6世紀以降一気に住居が増加している。

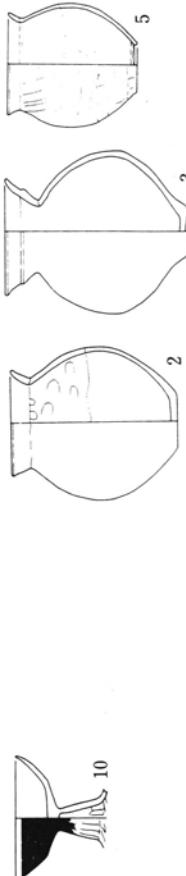
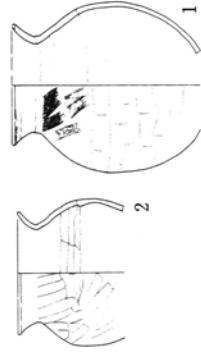
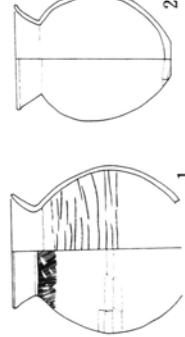
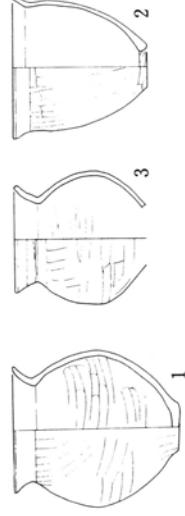
当然ではあるが、4～5世紀段階に多くの住居が造られた荒砥地域、一定の人口と経済基盤のある地域のなかで、3つの居館が継続的に造られたのである。その果たした役割については、残念ながら明らかでない。今後刊行されてくる多くの調査報告書の分析と5世紀以降多く展開する古墳群との関係等をもとに、さらなる研究の進展を期待したい。

おわりに

これまで検討してきたことをまとめて、おわりとしたい。

- ① 荒砥地域の比較的狭い範囲に、5世紀代の居館が3つつくられている。
- ② 3居館には新旧関係が存在する。最も古い居館が丸山居館、次が荒子居館、最後に梅木居館であると考えられる。
- ③ 3居館の規模は大きく異なり、最も大きな梅木居館の柵列の中に堀を含む荒子居館が、荒子居館の柵列の中に堀を含む丸山居館がそれぞれ入る大きさとなっている。小さな居館から次第に大きな居館になってゆくようである。
- ④ 居館が造られる荒砥地域には、以前から集落

 <p>丸山遺跡20住</p>	 <p>丸山遺跡21住</p>	 <p>丸山遺跡環壕 南西部</p>	 <p>荒砥荒子遺跡 居館の堀</p>	 <p>荒砥荒子遺跡 9号溝</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・館環壕内の最も大型の住居</li> <li>・東西5.6m南北5.3m</li> <li>・炉</li> <li>・覆土は4層で自然堆積</li> <li>・文献26</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・館環壕内の区画のほぼ中央に位置する。</li> <li>・東西5.0m南北3.7m</li> <li>・炉も竈も無し</li> <li>・覆土は9層で自然堆積</li> <li>・文献26</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・館環壕の南西部の環壕底部付近から出土</li> <li>・覆土上層にFAが堆積</li> <li>・文献26</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・居館の中から出土</li> <li>・堀の覆土上面で底面から約25cmの所に、Hr-FAの堆積が確認されている。</li> <li>・文献43</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・居館とほぼ同時存在とを考えられる溝から出土</li> <li>・溝の覆土上面で底面から40~60cmの所に多くの場所でHr-FAの堆積が確認されている。</li> <li>・文献43</li> </ul>

梅木遺跡14住	梅木遺跡20住	梅木遺跡23住	梅木遺跡27住
			
<ul style="list-style-type: none"> <li>館の堀により住居の北約1/3壊されている。</li> <li>東西3.5m×南北不明</li> <li>竈を持つ</li> <li>覆土は4層で自然堆積</li> <li>文献12</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>館の柵列により住居床下まで掘られている。</li> <li>規模不明</li> <li>竈か竈か不明</li> <li>覆土は3層で自然堆積</li> <li>文献12</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>館の柵列により住居床下まで掘られている。</li> <li>東西3.4m南北約3.4m</li> <li>竈</li> <li>覆土は7層で自然堆積</li> <li>文献12</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>館の柵列により住居床下まで掘られている。</li> <li>東西3.4m南北3.3m</li> <li>竈</li> <li>覆土は3層で自然堆積</li> <li>文献12</li> </ul>

文献は151ページに掲載

第107図 3居館に関連した遺構出土遺物

#### 第4章 調査成果と整理のまとめ

##### 荒砥地域古墳時代時期別住居数

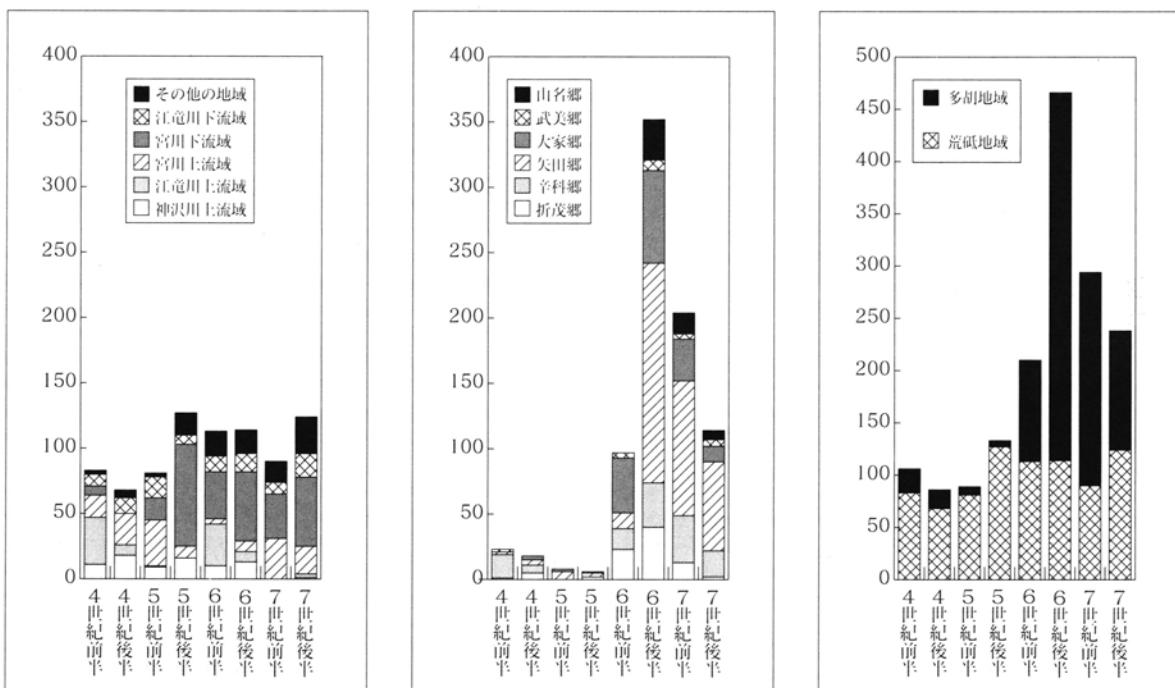
	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	5世紀後半	6世紀前半	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	計
神沢川上流域	11	18	9	16	10	13	0	1	78
江竜川上流域	36	8	1	0	32	8	0	3	88
宮川上流域	17	24	35	9	4	8	31	21	149
宮川下流域	7	0	17	78	36	53	34	53	278
江竜川下流域	9	12	16	7	12	14	9	18	97
その他の地域	3	6	3	17	19	18	16	28	110
計	83	68	81	127	113	114	90	124	800

##### 多胡郡地域古墳時代時期別住居数

	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	5世紀後半	6世紀前半	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	計
折茂郷	1	5	0	2	23	40	13	2	86
辛科郷	18	6	0	0	16	34	36	20	130
矢田郷	2	4	6	3	12	168	103	68	366
大家郷	0	3	2	1	42	71	32	12	163
武美郷	2	0	0	0	4	8	4	5	23
山名郷	0	0	0	0	0	31	16	7	54
計	23	18	8	6	97	352	204	114	822

##### 荒砥地域と多胡郡地域古墳時代時期別住居数比較

荒砥地区	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半	5世紀後半	6世紀前半	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	計
荒砥地域	83	68	81	127	113	114	90	124	800
多胡地域	23	18	8	6	97	352	204	114	822
計	106	86	89	133	210	466	294	238	1622



ここに記載した多胡郡内の郷の位置は、筆者の考えによる。

折茂郷とは天引川と安坪川の間で、長根安坪遺跡・折茂東遺跡・長根遺跡群・道六神・西場脇遺跡を含む。

辛科郷とは安坪川と大沢川の間で、長根羽田倉遺跡・神保富士塚遺跡・植松遺跡・神保下条遺跡を含む。

矢田郷とは大沢川と矢田川の間で、多胡蛇黒遺跡・柳田遺跡・矢田遺跡・椿谷戸遺跡・川内遺跡・御内遺跡・竹腰遺跡を含む。

大屋郷とは矢田川と土合川の間で、入野遺跡・東沢遺跡・多比良追部野遺跡を含む。

武美郷とは土合川西の地域で黒熊遺跡・黒熊栗崎遺跡・黒熊中西遺跡・黒熊八幡遺跡を含む。

山名郷（山部郷）とは烏川と鮎川の合流地点から西で、山名原口・山名戸谷遺跡・田端遺跡を含む。

### 第3節 荒子・丸山・梅木遺跡の居館について

が継続的に造られている。それらの集落は居館ができるることにより、増加あるいは減少傾向は示していないようである。つまり集落の増減と居館との間に、大きな関係を認めることはできなかった。

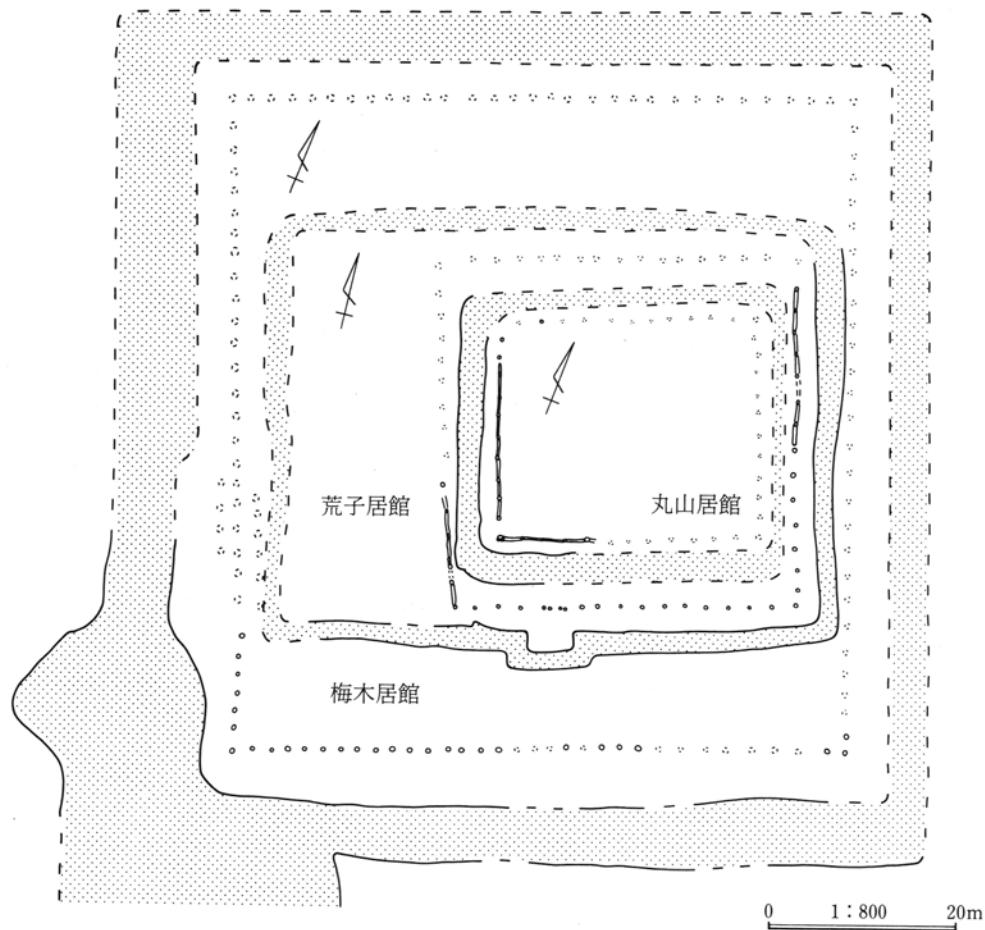
⑤ 古い段階の丸山居館には、ほぼ全区域にわたり竪穴住居が造られている。次の荒子には、竪穴住居が数軒存在するが、全面ではなく中央部には、別な施設があったものと思われる。しかしその施設が、どのようなものかは不明である。最も大きな梅木居館では、残念ながら内部施設が不明である。数軒竪穴住居と掘立柱建物等の施設があったと考えたい。

このように時期が新しくなるにつれて、竪穴住

居だけでなく、他の施設を必要とし拡大していったものと思われる。

⑥ 3居館の平面形としての規模は異なるが、柵列を造っている柱穴の大きさと深さは不思議と共通している。深さは60cm以上が多く、柱穴の径は30cm前後となっている。おそらく高さ2m前後の大きな柵列となっていたであろう。柵の柱と柱の間をどのような構造でつないでいたのか不明であるが、壮大な柵列であり外部から中は見えない構造も考えられる。

⑦ 居館の堀は、梅木居館では幅が大きいが、丸山居館と荒子居館では幅が狭い。この堀は区画することに意味があり、防御的な役割は多くなく、堀以上に柵列が重要視されていたと考えた



第108図 3居館の平面規模の比較（推定復元図による）

い。

⑧ 堀の内側と柵列との間には一定の距離がある。この距離は堀が大きい梅木居館が最も大きく3~6mも離れている。他の2居館は1~2mである。堀の大小に比例しているようである。おそらく堀の土を盛り上げて、簡単な土壘が築かれていたことが考えられる。

⑨ 荒子居館の玄関と思われる張り出し部分が、ほぼ東西の堀の中央部に位置している。しかし柵列は西側まで全面に造られているわけではなく、東側に片寄っている。張り出しの内側の柵列では柱穴の間隔が他と異なり、門に似た構造があったと考えられる。その位置は柵列全体から見るなら、大きく西に片寄っていることになる。なぜこのような片寄った構造になっているのであろうか。1つの可能性として次のことも考えられる。平安時代以前に北西部を大きく谷によって削られている。この大きな谷が形成

される前から低地であり、小さな河川が流れていたのではないだろうか。そのために北西部は低く溝と柵列で囲うことが出来なかった。そのために柵列が大きく東側にずらして造られた。

⑩ 堀の中に水を、池のよう溜めていたのか、あるいは常に流れるような構造にしてあったのだろうか。このことは堀の土層観察から水は流れていなく、また池のよう溜めてはいなかったことを示す。さらに堀底部の高さを比較した結果、荒子居館では北東と南西の堀の間に1mの高さの違いがあり、水を溜めておくことは出来ないことが明かである。また居館の東を堀に平行した溝が造られており、出土土器から同時期に使われていたことが明らかである。水を堀の中に流していないことが、このことでも明らかである。

#### 註1

この深さに対しどのくらいの長さの柱が地上に立っていたのであろうか。様々な条件で異なると思うが、全体の長さに対し地中の深さを2割と考えてみる。約3mの2割が60cmとなる。3m-0.6m=2.4mとなり、計算上地上に2.4mの柵列が建てられていたことが仮定できる。布堀を持ち基礎から柵を築き、高さ2m以上、幅30~60mの柵列である。当然周辺から中を見渡すことは出来ない。溝と異なりこの柵列は巨大である。

#### 参考文献

- 鹿田雄三ほか「荒砥荒子遺跡の方形区画遺構」『研究紀要』1 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984  
『梅木遺跡』山武考古学研究会 1986  
『丸山・北原』群馬県教育委員会 1986  
『丸山・北田下・中畑・村主・中山B遺跡』群馬県教育委員会 1988  
『古代東国の王者』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
群馬県立歴史博物館 群馬県教育委員会 1988  
『再現・古代の豪族居館』国立歴史民俗博物館 1990  
『季刊考古学』第36号 1991  
『古代学研究』141 古代学研究会 1998  
『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会 1988  
『東国土器研究会』第5号 東国土器研究会 1999

## 文献

- 1 「富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群」前橋市教育委員会 1979
- 2 「富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群」前橋市教育委員会 1979
- 3 「富田遺跡群・西大室遺跡群」前橋市教育委員会 1982
- 4 「西大室遺跡群II」前橋市教育委員会 1981
- 5 「後二子古墳・小二子古墳」前橋市教育委員会 1992
- 6 「内堀遺跡群II・III・IV・V・VI・VII」前橋市教育委員会 1989~1995
- 7 「中二子古墳」前橋市教育委員会 1995
- 8 「前二子古墳」前橋市教育委員会 1993
- 9 「荒砥上諏訪遺跡」群馬県教育委員会 1977
- 10 「大室小学校校庭III遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
- 11 「荒砥上川久保遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 12 「荒砥五反田遺跡」群馬県教育委員会 1978
- 13 「富田遺跡群・西大室遺跡群」前橋市教育委員会 1982
- 14 「梅木遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
- 15 「横儀遺跡群I・III・IV・V・VI」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990~1993
- 16 「横儀遺跡群IV・VI」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1992・1993
- 17 「横儀遺跡群II」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
- 18 「東原A・B遺跡」荒砥北部遺跡調査会 群馬県教育委員会 1988
- 19 「山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡」群馬県教育委員会 1984
- 20 「丸山・北田下・中畑・村主・中山B遺跡」群馬県教育委員会 1988
- 21 「丸山・北田下・中畑・村主・中山B遺跡」群馬県教育委員会 1988
- 22 「荒砥北部遺跡群」荒砥北部遺跡群調査会 群馬県教育委員会 1988
- 23 「阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山」群馬県教育委員会 1989
- 24 「小稻荷遺跡」前橋市教育委員会 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987
- 25 「提東遺跡」群馬県教育委員会 1985
- 26 「下境I・天神遺跡」群馬県教育委員会 1990
- 27 「上西原・向原・谷津」群馬県教育委員会 1986
- 28 「諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡」群馬県教育委員会 1998
- 29 「上西原・向原・谷津」群馬県教育委員会 1986
- 30 「丸山・北原」群馬県教育委員会 1986
- 31 「丸山・北田下・中畑・村主・中山B遺跡」群馬県教育委員会 1988
- 32 「諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡」群馬県教育委員会 1998
- 33 「柳久保遺跡群I・V・VII」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985
- 34 「鶴谷遺跡群発掘調査概報II」前橋市教育委員会 1981
- 35 「鶴谷遺跡群発掘調査概報」前橋市教育委員会 1980
- 36 「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 37 「荒砥北三木堂遺跡I」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 38 「荒砥大日塚遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 39 「今井道上遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 40 「二之宮谷地遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 41 「荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 42 「荒砥天宮遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 43 「二之宮宮下東遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 44 「荒砥島原遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 45 「地田栗III遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1994
- 46 「荒砥東原遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 47 「舞台・西大室丸山」群馬県教育委員会 1991
- 48 「西大室丸山遺跡」群馬県教育委員会 1997
- 49 「荒砥荒子遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000
- 50 「荒砥下押切II遺跡・荒砥中屋敷II遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
- 51 「荒砥上ノ坊遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 52 「荒砥青柳II遺跡」前橋市文化財発掘調査団 1995
- 53 「中並木遺跡」前橋市文化財発掘調査団 1994
- 54 「飯土井上組遺跡・波志江中峰岸遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 55 「飯土井中央遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 56 「飯土井二本松遺跡・下江田前遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 57 「荒砥二之堰遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 58 「下野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」帝室博物館
- 59 「下触向井遺跡」赤堀町教育委員会 1988
- 60 「今井南原遺跡発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1981
- 61 「川上遺跡」赤堀村教育委員会 1980
- 62 「下触片田遺跡」赤堀町教育委員会 1990
- 63 「下触牛伏遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 64 「宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1980
- 65 「波志江今宮遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 66 「五目牛清水田」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 67 「大沼下遺跡・西稻岡遺跡」伊勢崎市教育委員会 1997
- 68 「群馬県史研究(2)」群馬県史編纂委員会 1975
- 69 「御富士山古墳」伊勢崎市教育委員会 1990
- 70 「荒砥前原遺跡・赤石城址」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 71 「中原遺跡群」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1996
- 72 「筑井中屋敷」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
- 73 「今井白山遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 74 「筑井八日市遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 75 「小島田八日市遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
- 76 「宮田遺跡」宮田遺跡調査会 1996
- 77 「富田遺跡群・西大室遺跡群」前橋市教育委員会 1982
- 78 「富田遺跡群II・宮下遺跡」前橋市教育委員会 1981
- 79 「富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群」前橋市教育委員会 1979
- 80 「稻荷前遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1996
- 81 「荒砥北部遺跡群発掘調査概報」群馬県教育委員会 1984
- 82 「赤堀村地蔵山の古墳I」赤堀村教育委員会 1977
- 83 「北関東自動車道(高崎~伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査事業平成10年度事業概要」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999